「小暮。社員寮、二〇六号室だったよな？」

　社員寮へ引っ越して一週間ほど経った、ある日の退勤間際。黒瀬さんが僕の机へやってきた。

（なんだろう……）

　同じ部署で働く、僕より二つ年上の先輩。
　口が悪くて目つきも鋭いけれど仕事は誰より早い。班長補佐として勤務表の作成も任され、困っている人を見つけると、文句を言いながら結局最後まで面倒を見るような人だった。

「はい。まだ慣れてないですけど」
「やっぱ隣か。俺は二〇五号室だ」
「黒瀬さんもあの寮なんですか？」
「ああ。今月は二階の当番も俺だ。設備で困ったら、勝手にいじる前に言えよ」

　ぶっきらぼうな言葉のあと、黒瀬さんは僕の反応

を探るように目を細めた。

「壁を軽く叩けば気づく。あそこ、馬鹿みてぇに何でも聞こえるからな」
「やっぱりかなり薄いんですね」
「一週間もいりゃ、もうわかってんだろ」

黒瀬さんは口の端を意地悪く上げ、僕の机から離れていった。
職場ではなんだかんだ慕われている。それなのに僕にだけは遠慮がなく、小さな失敗まで見つけて容赦なくからかってくる人だった。

（まさか、ね……？）

その夜も、まだ荷物の片づききっていない部屋で、壁の薄さを再確認させられた。
隣の咳払いも頁をめくる乾いた音も、椅子を引く軋みも全部筒抜けだった。もとは大部屋を板で細かく仕切ったらしく天井との間には隙間まで空いてい

る。

（寮費が安いんだから、これくらいは我慢しないと……）

そう自分に言い聞かせながら畳の上へ布団を敷くと、板一枚向こうに黒瀬さんがいるのを嫌でも意識してしまった。

「ん……っ♡ はぁ……っ♡」

仕事続きで疲れているはずなのに夜になると妙に身体が火照ってしまう。消灯して部屋着のまま布団に潜り込むと、お腹の奥がじんわり疼いて太ももをすり合わせずにはいられなくなった。

隣の物音がしなくなり、もう眠っただろうと判断して、僕はそっと下着の中へ指を滑り込ませた。

「あっ♡ んぅ……っ♡」

慣れた指先で前の小さな芽に触れると、それだけで腰がびくんと跳ねる。

僕には男の身体にはないはずの器官がある。小さなクリもその奥へ続く膣もある。このことを知っている人はほとんどいない。

（誰にも知られたくないな……）

就職してからは、仕事の疲れや不安を紛らわせるように、夜に一人で慰めることが増えていた。

声を殺しながら、ゆっくり円を描くように撫でる。

（壁が薄いのはわかってる……！♡ だから静かに、ほんの少しだけ……♡）

そう思っていたのに。

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅっ♡

自分の指が立てる水音がやけに大きく響く。

「はぁ……っ♡ んっ……♡ ふぁ……っ！♡」

（だめだ……♡ どんどん濡れてきちゃう……♡）

クリがぷっくり膨らんで、少し触れただけで腰が浮く。

（もっと強くしたい……♡ もっと速く……♡）

欲が勝って、指の動きが止められなくなる。
こりこり♡ こりこり♡ こりっ♡
すりすり♡ すりすり♡ すりっ♡

「んっ♡ んぅ……っ♡ ふぅ……っ！♡ あっ……♡」

声が漏れそうになるたび唇を噛んで押し殺す。けれど快感が溜まっていくとどうしても鼻にかかった甘い息が零れてしまう。腰が勝手にくねって布団がかすかに擦れる音を立てた。

（気持ちいい♡ 気持ちいいのに、もどかしい……♡ 自分の指だと、あと一歩のところで届かない…

…♡)

　それでも止められなくて、僕はクリを転がし続けた。

「あ……っ♡ んは……っ♡ ふぁっ……！♡」
（もう少し……♡ もう少しでイけるのに……！♡）

　そう思った、その瞬間。
　コンコン。
　板を軽く叩く音がした。そして板一枚向こうから、いつもの低くてぶっきらぼうな声が聞こえた。

『丸聞こえだぞ。馬鹿♡』
「……ッ！？♡」

　血の気が引いた。全身が一瞬で冷たくなって、それから恥ずかしさで火を噴いたみたいに熱くなる。

（黒瀬さんだ……！♡ 黒瀬さんの声だ……！♡ 聞

こえてた……！？♡ 全部……！♡ 僕が一人でしてたこと、全部……！♡）

　布団を頭から被って息を殺す。心臓がばくばくして、耳まで熱い。
　けれど板の向こうの声は、怒っても呆れてもいなかった。職場で僕を追い詰めて遊ぶときと同じ、意地の悪い響きだった。

『ここ何日か、毎晩聞こえてた。ずっとな♡』
（毎晩……！？♡）

　その一言に、頭が真っ白になる。

（今夜だけじゃなかった……！♡ 黒瀬さんはずっと聞いてたんだ……！♡ 僕が一人で火照って指でいじって声を我慢してイってたのを全部……！♡）
「や……嘘です……っ♡」

　声が震えた。

『本当だ。壁が薄いのに、こそこそ盛ってりゃ聞こえるに決まってんだろ♡』
（もう消えたい……！♡ 明日からどんな顔して職場で会えばいいの……！♡）

　けれど妙なことに、その羞恥がさらに身体を熱くさせていた。

（聞かれてた……！♡ それって、見られてたのと同じじゃん……！♡）

　そう思うだけで奥がきゅうっと疼いて、とろりと蜜が滲み出てくる。

（恥ずかしいのに、なんで濡れちゃうの……！？♡）

　しばらく沈黙が続いたあと、黒瀬さんは僕が逃げないと見抜いたように言葉を続けた。

『おい、小暮♡ そんなに下手なら、俺がイかせて

やろうか♡』
「……え？♡」
『今夜は一人じゃ最後までイけねぇんだろ？♡ さっきから、みっともねぇ声ばっか漏らしてたもんな♡』

その声は、まるで僕の身体の全部を見透かしているみたいだった。

（あと少しだったのも、バレてる……！♡ 断らなきゃ……！♡ 相手は先輩で、職場の人で……！♡ こんなの絶対だめなのに……！♡）

頭ではそう思うのに身体の奥はもう勝手に期待し、とろりと蜜を溢れさせていた。断らなきゃと思うほど疼きは膨らみ、口から出かかった拒絶の言葉まで簡単に溶けていく。

「……ほんとに手伝ってくれるんですか……♡」

気づけば、そんな言葉が口から零れていた。

『当たり前だろ♡ 今から行く。逃げずに鍵開けて待ってろ♡』

板の向こうで衣擦れがして、廊下へ出る引き戸が静かに開く音がした。足音が回り込んでくる。僕は布団から這い出して、よろよろと自分の引き戸に手をかけた。鍵を外す指が震えている。

（こんなことしちゃだめなのに……！♡ 明日も会うのに……！♡）

それでも止められなかった。
引き戸を開くと、目の前に立つ黒瀬さんの姿に、僕は息を呑んだ。

（来た……！♡ 本当に、黒瀬さんが僕の部屋まで来ちゃった……！♡）

職場では眼鏡をかけているのに今は外していて、素の顔は驚くほど整っていた。少し乱れた前髪の下から鋭い目で僕を見下ろし逃げ出さないか確かめるように口の端を上げている。

寝る前らしくシャツ一枚のラフな格好なのにそれがかえって色気を際立たせていた。肩幅が広くて腕も厚くて、職場で見るスーツ姿よりずっと大きく見えた。

（職場でも怖いのに……！♡ 今はもっと、逃がしてくれそうにない……！♡）
「よぉ、小暮♡ 本当に開けて待ってるとか、どんだけ俺に触られたかったんだよ♡」

そう言った黒瀬さんは、僕の顔を眺めながら意地の悪い笑みを深くした。

「真っ赤じゃねぇか♡ 職場じゃ澄ました顔してんのに夜はずいぶんいやらしいんだな♡」
「……ッ！♡」

彼は迷いもせずに部屋へ入ってきて、後ろ手に引き戸を閉めた。それだけで狭い部屋が彼の気配でいっぱいになる。逃げ場なんて、もうどこにも無かった。

閉まった戸の向こうで廊下を歩く足音が聞こえた。僕は反射的に息を止める。誰かが通り過ぎるまで黒瀬さんは何も言わず、僕の唇へ人差し指をそっと当てていた。

「ほらな。小さな息まで筒抜けだ♡」
「……だから静かに……っ♡」
「今さら俺に頼むのか？♡ お前が我慢できるなら、俺も黙っててやるよ♡」

耳元で囁かれただけなのに、下腹がきゅうっと疼いた。黒瀬さんの指が僕の唇の輪郭をなぞり、そのまま顎を持ち上げる。

「さっき板の向こうでどんな馬鹿面していじってたんだ？♡」

「み、見せられないです……っ♡」
「なら今俺の前で全部見せろ♡」

唇が重なる直前で止まり息だけが触れ合う。焦らすように何度も近づいては離されて、待ちきれずに僕から顎を上げた瞬間ようやく口づけられた。

「ん……っ！♡ ふぁ……っ♡ んぅっ……♡」

最初は触れるだけだった口づけが少しずつ深くなる。舌先で唇を開かれ、逃げた舌をゆっくり絡め取られた。大きな手に頬を包まれたまま息が続かなくなるまで口の中をあやされる。

「ふぁ……っ！♡ んっ！♡ んぅ……っ♡ はぁっ……♡」

声を飲み込むように、また唇を塞がれる。板の向こうへ聞かせたくないのに、口づけの合間から甘い息が零れてしまう。

「さっきより声出てるじゃねぇか♡ 先輩にキスされただけでこれかよ♡」
「黒瀬さんがさせてるのに……っ♡」
「ああ♡ だからもっと聞かせろ。壁の向こうまでな♡」

背中へ回った腕に抱き寄せられ胸板へ押し付けられる。服越しでもわかる体温と硬さに包まれると、先輩を部屋へ入れてしまったのだという実感が遅れて押し寄せた。
こわいはずなのに、彼のシャツを掴んだ指は離れない。むしろ次の口づけを待つように、身体を預けてしまっていた。

（もう、逃げたいなんて思えない……♡）

黒瀬さんに促されるまま、僕は部屋着のズボンを脱ぎ、乱れた布団の上に腰を下ろした。彼はそのまま僕の前に膝をつく。

「そのまま続けろ♡ 先輩がちゃんと見ててやるよ♡」
「む、無理です……っ、見られながらなんて……♡」
「散々聞かせといて今さら恥ずかしがるな♡ できねぇなら、俺がやってやるよ♡」

有無を言わさず大きな手が僕の膝にかかる。閉じようとした太ももをいとも簡単にこじ開けられてしまった。力が全然違う。抵抗したつもりなのに何でもないことのようにあっさり開かされる。

「もうこんなに濡らしてんのか♡ 一人で散々いじってまだ足りねぇんだな♡」
「い、言わないで……っ♡」

濡れた下着の上から彼の指がそっとなぞる。くちゅ、と小さな音が立って恥ずかしさに腰が逃げる。けれど彼はそれを許さず布越しのまま焦らすようにゆっくりと撫で始めた。
すりすり♡ すりすり♡ すりっ♡

「あ……っ♡ んは……っ！♡ ふぁっ……♡」
（直接、触ってくれない……♡）

わざと布一枚を挟んだまま、彼はじっくり時間をかけて撫でてくる。もどかしい刺激に腰が勝手にくねった。濡れた下着が肌に貼りついて、擦れるたびにクリがじんじん疼く。

「焦らさないで……っ♡」
「どこをどうしてほしいんだ？♡ 欲しいなら先輩にちゃんと言え♡」
「……直接さわって……っ♡」

恥ずかしさをこらえてそう口にすると彼は満足そうに笑った。けれどすぐには応えてくれなかった。下着の縁を指でなぞって際どいところだけを撫でてはわざとクリを外す。
つつ♡ つつ♡ つんっ♡

「んっ！♡ ひぅ……っ♡ そこじゃないです……っ

♡ もっと……っ！♡」
「もっとじゃわかんねぇよ♡ ここか？♡ それともこっちをいじられたいのか？♡」

太ももの付け根、割れ目の両脇、ぎりぎり届かない場所ばかりを撫でられて焦れったさに涙が滲む。そうやって散々焦らしてから彼はようやく下着の横からするりと指を滑り込ませてきた。

「あ……っ！♡ ひゃっ……♡ んぅっ……♡」

直に触れられて、びくんと腰が跳ねる。彼の指先が膨らんだクリの根元を探り当てた瞬間、動きがわずかに止まった。
予想していなかった感触を確かめるようにもう一度なぞられ、黒瀬さんの片眉が上がる。

「へえ。小暮、お前こういう身体だったのか♡」
「……っ！♡」
「ここか♡ 触っただけで腰跳ねさせてずいぶんわ